

作田啓一における「放心」概念の検討
——直線的時間の脱臼と同一性の解体——
Considering Keiichi Sakuta's concept of "an absent mind"
: To be out of joint of the linear time and Identity disorder

佐藤 裕亮
SATO Yusuke

When we live in daily life, we see an available side of things. The things then have a solid boundary line. This paper aims to reconsider this from a familiar phenomenon, "an absent mind". Keiichi Sakuta said, we see an available side of daily things because we pay attention to life then. Sakuta named this perspective "the perspective of the lives". Sociology of lives presupposed this perspective. But when we are in an absent mind, we see a hidden or unfamiliar side of things. Sakuta named this perspective "the perspective of the dead". Therefore linear time is out of joint and we glance at daily things which have no boundaries or unfamiliar. This paper describes the perspective of the dead and the landscape of the time of the dead and introduces a new perspective of sociological concepts of the self.

キーワード：生活への注意 (attention to life)、放心 (an absent mind)、直線的時間 (linear time)、脱臼 (out of joint)、物語 (narrative)、自己 (self)

1. 問いの所在

本稿は、社会学者の作田啓一 (1922~2016) が随所で断片的に展開した時間論を、「放心」概念を軸に再構成しつつ、それを文学理論における物語論と接続することで、作田の時間論の示唆を検討するものである。

私たちは、つうじょう、時間というものは不可逆的であり、かつ過去から現在、そして未来へと流れていくものであるように感じている。しかし、時間の社会学が教えるのは、このような時間認識がある一定の歴史的・地理的制約を受けていること、つまり、社会的に構成されていることである。たとえば真木悠介は、「未開社会」「原始社会」などの時間に関するテキストの分析を通して、「近代社会」の時間意識が、「虚無化していく不可逆性としての時間の観念」と「抽象的に無限化されうる量としての時間の観念」の組み合わせから構成されていることを論じた。真木によれば、前者は「自然からの人間の自立と疎外」による自然との「〈生きられる共時性〉の解体」を、そして後者は「共同態からの個人の自立と疎外」による、共同態の「〈生きられる共時性〉の解体」を、それぞれ要因としている (真木 2003)。

(狭義の社会学者ではないが) H.ベルクソンもまた、主著の1つ『時間と自由』(初出

1927年)のなかで、量にもとづいて「無制限に分割可能な」空間を「質なしの空間」「等質空間」、「無制限に分割可能な」時間の観念を「等質的時間」と呼び、それらに対して「持続」を対置した。ベルクソンによれば、私たちが分割可能とみなしている「運動」(たとえば歩行)には、実際は「運動」の「持続」だけがあり、分割可能とみなすのは「知性の予見能力」の生み出す錯覚なのである(ベルクソン 2002)。社会学者の若林幹夫は、このベルクソンの議論を参照しながら、私たちが時間をあたかも空間のように「眺め view」していることを、「時間の風景」という概念で指し示している(若林 2014: 80-5)。

こうした仕事は、「近代」に生きている私たちにとって自明な——だからこそ問返されることのない——「近代」の時間認識のありようを明らかにするために、「原始社会」などの「近代」と異なる社会との比較社会学を行ったのであるが(真木 2008: 41)、この作業は同時に、「近代」を相対化することをとおして「近代」のオルタナティブを考える作業でもあった。そして、そこにあるのは、「近代」的な時間認識が「すべてではない」という想像力である。

ここで一度社会学から離れ、私たちの経験を思い返してみよう。そうすると、そこには「近代」的な時間の認識枠組から「病理」や「例外」と見なされるような生の経験があるということが思い出される。たとえば、すでに亡くなった人が夢に出てきて、その人と会話をしているのも不思議に思うことはない。また、今ここにおける経験と全く同じ経験を過去に行ったように感じるデジャヴ(既視感)という経験も、「近代」的な時-空間認識からは理解が難しい。これらは「近代」的な認識枠組からは「こぼれ落ちるもの」である。

しかし、ある一定の認識-理論枠組から「こぼれ落ちるもの」(岡崎 2016)こそ、作田啓一(1922~2016)が探求しようとした当のものであった。作田の仕事は、タルコット・パーソンズらのシステム論を独自に再構成し、戦前・戦後の日本社会の「価値」について研究した「価値の社会学」、ルソー研究やドストエフスキー研究などの「文学からの社会学」、J.ラカンその他の「現代思想」を下敷きに展開された犯罪研究などが知られており、作田に関する研究は、これらの仕事を対象としてきた。他方、本稿が対象とする時間論は、断片的に行われたに留まっており、その意義を検討する研究もない。しかし、作田の時間論は、作田が1970年代から継続して用いている「放心」概念と直接関わっている。そこで、作田の時間論を検討することは、作田の仕事を批判的に継承することを試みる私たちにとって、必要な作業である。

それでは、作田の時間論は私たちに何を教えるだろうか。本稿は、以上の問いに対して、作田の時間論を「放心」概念を軸に再構成しつつ、それを文学理論における物語論と、自己(self)についての物語論的アプローチである自己物語論と接続することで、その社会的示唆を検討する。本稿の構成について述べる。2章では、「放心」概念について詳細に触れる。そこでは、既視感と予感と分身という現象から、過去から現在、そして未来へと続く「直線的时间」が「脱臼」するという現象について説明する。作田の時間論の要は、この「直線的时间の脱臼」という点にある。3章では、作田の時間論が社会学に何を教えるかについて、物語論との関係で検討する。作田の時間論を物語論に接続することで、作田社会学の物語論的な書き換えの方向を示す。最後に、本稿のまとめを行なう。

2. 「放心」概念と時間軸上のトラブル——既視感と予感

(1) 「放心」と同一性の解体

本章では「放心」概念を手がかりに、「死者の時 - 空間」について確認していく。作田によれば、「放心」状態において経験されるのは、既視感・予感という時間軸上のトラブルと、分身という空間軸上のトラブルである。順に見ていこう。

作田は「日本近代文学における自我の放棄(続)——リアルな現れる場所」(作田 2016b)という論稿で、「死者の立場」と「生活者の立場」という2つの時 - 空間認識の様式があることを、次のように述べている。

死者(死にゆく者)の立場に身を置く者にとって、眺められる自然はいつも格別に美しく感じられるとは思えないが、しかし自然を含む事物一般は、生活者の立場に身を置く時には蔽われていた格別の層を現すことは確かである。生活者の立場に身を置く時、人の意識は「生活への注意」(ベルクソン)に動員され、事物を照らし出す光はほとんど生活のうえで利用可能な層に限られる。自我あるいは意識の活動時には、事物はその限られた層においてのみ自らを現すに過ぎないのだ。これに対し、自我あるいは意識の放心時には、活動期においては隠れていた事物の格別の層が姿を現すのである。(作田 2016b: 251)

前章の冒頭で書いた、私たちがふつう採用する「近代」的な時間認識が「生活者の立場」と呼ばれ、それと対照的な認識が「死者の立場」と呼ばれている。作田が「死者の立場」という方法を意識的に採用した文学者としてその作品を分析するのは、梶井基次郎(1901~32)である。あらかじめ述べておくと、「死者の立場」は、その成立条件と「主体 - 客体」関係によって、「生活者の立場」と区別される。

まずは「主体 - 客体関係」から論じよう。作田は梶井の小説にある「見る」と「視入る」(「凝視する」という動詞に着目して、「死者の立場」における主体と客体の認識を、次のように説明する。単に「見る」場合、対象はそれまでと同様に、自己の外側に確固として存在するのに対して、「視入る」場合、「自己の一部あるいは全部」が対象に「乗り移る」ので、「対象は内側に入ってくる」。「このような凝視を通して対象はいわば「心の風景」[引用者注：梶井の用語]になる」。作田によれば、梶井は「見る」と「視入る」とを意識的に区別していることから、「凝視」によって事物の「隠れた相」を描くことが自分の創作者としての個性であることを自覚していたという(作田 2016b: 249)。

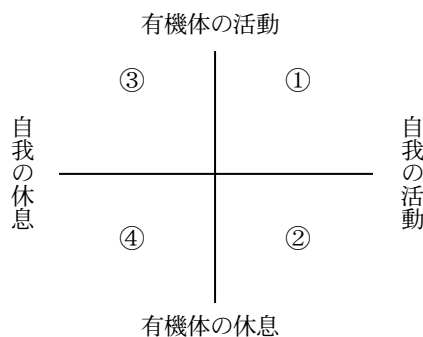
それでは、「視入る」ことの条件はどのようなものか。作田によれば、「視入る」ことによる事物の境界の稀薄化は、ふつうの覚醒時——つまり「自我の活動状態」——においては起こりそうにない。覚醒状態において、人は生活上の必要を満たすために対象を操作しやすいように、自己と対象を切り離し、対象を外界に位置づけるからである。したがって、この状態においては自己と外界との境界の稀薄化の傾向は抑圧される。そこで、希薄化の傾向が台頭しやすいのは「自我の休息状態」である(作田 2016b: 250)。作田は、自我には「活動と休息のリズム」があると考えている。作田によれば、「自我の活動と休息のリズムは大体においてそれを担う有機体のリズムと重なっているから、自我の活動は有機体の

覚醒時に起こりやすく、自我の休息はその睡眠時に生じやすい。しかし、有機体のリズムと自我のリズムは完全には重ならない。「有機体の睡眠時に自我はまれには夢遊病者として活動することがあるし、その覚醒時に自我は放心状態に陥ることがあるからだ」(作田 2016b: 250)。したがって、重要なのは、「活動との対比」という観点から見た場合の、夢と「放心」との同形性である。

作田は「死者の立場」の条件である「自我の休息状態」について、バルクソンの「生活への注意 (attention a la vie)」という概念を用いて、次のように説明する(作田 2016b: 250-1)。作田によれば、「生活への注意」の活動時、事物(人間を含めて)はそれぞれ明確な輪廓を具えているので、相互に浸透しあうことはない。その意味で、そのとき事物は、空間軸に関して同一性を保持している。また、「生活への注意」の活動時、事物は「現在」か「過去」のどちらかに位置づけられているので、既視感や夢のように、「現在」であるとともに「過去」でもあるといったような「異なった時制への共同所属」はない。その意味で、そのとき事物は時間軸に関して同一性を保持している。しかし、これらの同一性は、夢においてはしばしば失われる。たとえば、夢の世界では自己が複数の人物となって出現したり、死んだと分かっている人物が生きて動いていたたりしていても、私たちは矛盾を感じない。同様に、「放心」状態においても、事物の同一性はしばしば失われる。

作田は行っていないが、以上の議論を図示しよう(図1)。縦軸は有機体、横軸は「自我」を表している。①は、有機体と「自我」がともに活動している状態を指す。②は有機体は休息しているものの、「自我」は活動状態にある。先に作田はこの状態を「夢遊病」と呼んでいる。③は、有機体は活動しているものの「自我」の休息は状態にあり、作田が「放心」と呼ぶ状態である。④は有機体と「自我」がともに休息状態にあり、これは夢である。夢と「放心」は、有機体の観点からは睡眠と覚醒という相違がある。だが、「生活への注意」という概念を導入すれば、両者には「生活への注意」が弛緩した状態にあるという共通性が見えてくる。そして、そのとき、事物は時-空間軸上の同一性を失うのである。

図 1



以上、作田の「放心」概念について確認してきた。しかし、ここで付け加えておくと、作田は夢については積極的には語らない。作田が「放心」概念で光を当てるのは、③の、有機体の活動(覚醒)状態に見られる「夢」=「白昼夢」である⁽¹⁾。時-空間軸上の同一性について、詳しくは次節で確認しよう。

(2) 既視感・予感・分身——時空間軸のトラブル

それでは、「放心」状態において経験される時-空間軸上の同一性の解体とは、具体的にどのようなものなのか。以下、既視感、予感、分身という3つの経験を見てゆく。まずは既視感について、梶井の一節を引こう。

彼は細い坂を緩りゆっくり登った。山茶花の花ややつでの花が咲いていた。堯は12月になっても蝶がいるのに驚ろいた。その飛んで行った方角には日光に撒かれた虻の光点が忙しく行き交っていた。〔引用者注：改行〕「痴呆のような幸福だ」と彼は思った。そしてうつらうつら日溜りに屈まっていた。……〔引用者注：改行〕「見てやしないだろうな」と思いながら堯は浅く水が流れている溝のなかへ痰を吐いた。そして彼等〔引用者注：遊んでいる子供たち〕の方へ近づいて行った。……穢い線が石墨で路に描かれていた。——堯はふと、これは何処かで見たことのある情景だと思った。不意に心が揺れた。揺り覚まされた虻が漠然とした堯の過去へ飛び去った。……〔引用者注：改行〕堯の虻は見つけた。山茶花を。その花卉のこぼれるあたりに遊んでいる童子たちを。——それはたとえば彼が半紙などを忘れて学校へ行ったとき、先生に断りを行って急いで自家へ取りに帰って来る、学校は授業中の、なにか珍しい午後路であった。そんなときでもなければ垣間見ることを許されなかった、聖なる時刻の有様であった。(梶井 2008: 305-6)

ここで堯という人物は、自身の生活史上の「過去」——「聖なる時刻」——を、「現在」に重ね合わせている。

しかし、「放心」状態において経験されるのは、既視感だけではない。探偵小説家の夢野久作(1889~1936)が描いた予感という経験もまた、「放心」状態において経験されるものである。作田は夢野論(作田 2012)で、予感を例に、同一性の解体と時間の関係について触れている。その論旨の一部を確認しよう。

まずは作田が挙げている予感の一例を見よう(夢野『木霊』1934年)。その主人公は孤独を好む性格で、虚弱な小学校の教師である。独り空き地などで数学の問題などを解くのが彼の楽しみであった。大人になり、献身的な妻を迎えるも、一男を残して妻は亡くなり、男児もそのうち事故死する。もともと彼は神秘的な予感の感受性があったが、妻子の死以降、その感受性に拍車がかかり、しばしば今日こそ間違いなく汽車に轢き殺されるという不安に襲われながら線路上を歩いた。この線路伝いは家から学校への近道であるが、息子が誤って轢死した場所でもあるのだ。ある日、彼が線路上で別の道を行くかこのまま線路伝いに歩くかを思い迷っていると、踏切の中央で石像のように考え込む自分を幻視した。その予感通り、彼は踏切の中央で汽車に轢き殺される(作田 2012: 20)。

作田は既視感と予感に共通する「不思議な気分」を、「事実の知覚と表象」という観点と、「時間」という観点から説明する。

まず、予感と既視感において、何が起きているのか。作田によれば、「予感とその実現に立ち会う主体と観察者」が「不思議な気分にとらわれ」、既視感の場合にも同様に「主体や観察者に不思議な気分がもたらされる」のは、次の理由からである。すなわち、人間の「事実の知覚には必ずその事実の表象が伴う」。両者は「密着」している。だが、予感の場

合も既視感の場合もともにその「表象」と「事実」のあいだに「ずれ」、「隙間」が生じている。そこで、予感と既視感において「主体と観察者」に「不思議な気分」がもたらされるのは、「事実」と「表象」の「ずれ」、「隙間」に起因するのである（作田 2012: 20-4）。

「事実」と「表象」の「ずれ」に関連して、作田は既視感や予感とともに夢野が好んだ「分身」というモチーフを、「象徴体系」と「事実」との乖離として解釈する。先の『木魂』の主人公は、予感の際に、線路上を自分よりも先に歩く自分、つまり「分身」を見ていた。作田によれば、「分身」現象とは「象徴的世界の中で時空軸により定められた特定の位置を占める同一人格が分裂し、2つに分かれる現象である」。この現象は、「象徴体系」との関連で理解できる。言語を基礎とした「象徴体系」は、あらゆる個別的事実から「超越」して、個別的事実を「一般的な枠組み」へと編入する。その基本的な機能は、「時間と空間の軸」を設定し、個別的事実を時空軸と関連させることで、「象徴的世界の中での事物の同一性」を確保することにある。つまり、「象徴体系」との関連によって、事物は「1つの事物が異なった時点で、または異なった空間において同一なまま出現することはありえないという、一定の身分をもつことになる」。もちろん、象徴体系はそもそもあらゆる「事実」から外在しているので、「事実」と密着している「表象」とは異なる。しかし、「象徴体系」は「事実の知覚」に強い影響を与える（たとえば光のスペクトルを7色の虹として理解するのは、象徴体系のおかげである）。「だから、象徴体系は知覚を通してではあるが、思いのほか事実」に密着することがある⁽²⁾。しかし、ふとしたことで「象徴体系」と事物が「乖離」すると、「同一物が2つの時点でそのまま現れたり、またそれが2つの場所に同時に現れたりすることがある」。別の言い方をすると、「象徴体系」の「網の目のどこかの部分が緩み、事実がその網の目から洩れ落ちる」。以上の視角を、作田は「人格」にも適用する。

「行為主体である人格もまた時空間軸上に特定の位置を占める事実である」。しかし、「象徴体系」の網目が緩んだとき、「そこから洩れた事実としての人格は分裂する。その一部は象徴化された部分、もう1つは象徴化から洩れ落ちた部分である。これが分身の発生条件」である。そして、この「象徴体系の緩み」という「分身」の発生条件を、その形成にまで至らせる要因を、作田は「放心」であると仮定する（作田 2012: 23-8）。

さらに、作田は「時間」という観点から、その「不思議な気分」を次のように説明する。作田によれば、私たちはふつう「過去から現在へ、そして未来へと続く直線的な時間」をイメージしている。そのとき時間は不可逆的なものとしてイメージされるだけでなく、「この日常的な直線的時間軸こそ、我々の象徴的世界を安定させる基本的な軸である。だが、「放心」を契機として、そのような「直線的な時間」は「脱臼」⁽³⁾する。「直線的な時間」は私たちの「象徴的世界」を安定させる軸なので、「この時間のつながりを脱臼させることは、象徴的世界に住んでいる我々を不安に陥れる最も効果的な手法」なのである。そのため、既視感や予感や「分身」は、「放心」において生じる「事実と表象のずれ」や「事実と象徴体系の乖離」の現象なのであるが、その「ずれ」や「乖離」が「不思議」なのは、「放心」を契機として、私たちの世界についての認識を支える「直線的な時間」が「脱臼」していることが要因なのである（作田 2012: 19-20）。

ここまで私たちは「放心」概念を手がかりに作田の梶井論と夢野論を参照してきたが、ここでようやく私たちは作田の時間論の核にたどり着いた。作田の時間論のポイントは、「放心」状態（図1の③）における「直線的な時間の脱臼」に光を当てたことにある。それ

では、「直線的時間の脱臼」はどのような社会学的示唆を含んでいるだろうか。それについて検討する前段階として、次節で探偵小説における時間の役割について確認しよう。

(3) 探偵小説と時間——ベンヤミンの時間論へ

作田は「直線的時間の脱臼」のもたらす「不思議な気分」に関連して、夢野の探偵小説論を参照している。夢野はトリック重視の探偵小説を「本格」と呼んだが、作田によれば、「本格」が読者に与える文学的な感動は、探偵が現在から過去に遡るまなざしと、語り手が過去から現在へ語る時間の流れが「事件」において「遭遇」することにある⁽⁴⁾。このとき重要なのは、「直線的時間軸」上にしながら、それをいかに攪乱するトリックを思いつくのか、という点にある。それに対して、「事件そのもの」の怪奇性を扱う小説が「変格」であり、夢野は自身を「変格派」として位置づけたという（作田 2012: 32-3）。

ここで注意しておくべきは、「本格」と「変格」では、依拠する「時間」が異なるということである。たしかに探偵小説には「怪奇」的な事件が起こる。しかし、「本格」の場合、その怪奇性は結局のところ、「直線的時間」を操作するトリックが暴かれることで解決する。そこで、「本格」の依拠する「時間の風景」は、私たちを「不安」にさせつつも結局「直線的時間」を裏切ることはない。この点について、社会学者の内田隆三の探偵小説論は示唆を与えてくれる。内田は探偵が用いる「時間の技法」について、次のように述べている。

探偵はまず、現在に残された痕跡=証拠の位置をずらし、それらを過去の表象として読み取ることができるよう工夫する。次にそのように表象された過去の動機を通じて現在の結果を説明する。……このとき探偵は2つのまなざしを行使している。1つは過去に遡行するまなざしであり、「現在（痕跡）→過去」という想起の時間をたどる。もう1つは、現在の結果を説明しようとするまなざしであり、それは「過去（動機）→現在」という目覚めの時間をたどる。この往復運動において、探偵という行為がなぞるのは、現在に過去という深さをたくしこむような時間の構造である。そこでは、既に過ぎ去った時間を想起し、その時間のなかでしか現在は確かな相貌を現してくれない。（内田 2001: 191、強調原文）

ここで内田が用いる「想起の時間」と「目覚めの時間」という概念は、W.ベンヤミンの歴史哲学に依拠している。ベンヤミンによれば、歴史記述者が依拠する通俗的な時間認識は「進歩」という観念、つまり、「歴史が均質で空虚な時間をたどって連続的に進行するという観念」（ベンヤミン 1995: 658）によって支えられている。そのとき、「かつてあったもの（das Gewesene）」は「固定点」と見なされる（ベンヤミン 2003: 5-6）。そこで、通俗的な時間認識に依拠する人びとは、現在（present）を過去に比べてどれほど新しいかによって評価する。すなわち、自分たちは「規範から外れているという意味で「現代的」」であり、「自分の時代が深淵のまん前に立っている」という意味で「エポック」な時代に生きていると思っている。彼らには「あらゆる時代が、その時代にとって避けようもなく新時代に見える」。そこで、彼らは絶えず「最新のもの」を求めている。だが、ベンヤミンによる

と、「いつでも」新しいものでなければならぬがゆえに、「新しいもの」において世界は決して変貌せず、「同一のもの」であり続けているのだ。つまり、通俗的な時間認識が「新しいがゆえに同一である」という「地獄の時間としての「現代」を生み出してしま^{モデル}うのである（ベンヤミン 2003: 391-4）。そこで、ベンヤミンは、「かつてあったもの」つまり過去を、「目覚めた意識が突然出現する場」にするという「歴史を観るに当たってのコペルニクスの転換」を主張する。そのような認識の転換をすることで、「かつてあったものについてのいまだ意識されざる知」が出現するという（ベンヤミン 2003: 5-6）。

ベンヤミンの以上の議論を参照する内田によれば（内田 2001: 192-4）、探偵小説で探偵が過去の痕跡を「想起」することで「目覚め」させるのは、こうした通俗的な時間認識が忘却している「過去との深い絆」である。「エポック」ではないもの、「過ぎ去った時間」との連関のなかでの「現在」が、探偵という行為で明らかになるのだ。たとえばアガサ・クリスティーの『ABC 連続殺人事件』（1935年）では、A という頭文字の駅の町で A という頭文字の人物が殺され、B という頭文字の駅の町で B という頭文字の人物が殺され、C という頭文字の駅の町で……というように殺人事件が起きるのだが、この殺人の見かけの「連続性」は、「狂った犯人によって無意味な殺人が行われている」という「意味」をこの殺人の痕跡を見る人びと（例えば警察）にもたらず。だが、探偵はこの「連続性」を断ち切り、「個々の痕跡」を「別の仕方」で見せる（ここで、「過去の想起」と「現在における目覚め」は同時に行われている）。つまり、探偵は「残された痕跡とその布置にたいして」「異化作用」（E.プロット）を行なうのである（内田 2001: 186-7）。

ただし、探偵は過去の痕跡を「別の仕方」で見せるにしても、通俗的な時間認識それ自体を否定しているわけではない。内田によれば、探偵は過去を「現在の奥行きをそこで完結させる、底の知れた幻影」として扱うので、人びとを過去との「深い」（または「別の」）連関に「目覚め」させると同時に、「心地よい眠り」にも導く。「探偵の説明は諸々の痕跡を統合する物語に志向しており、物語の瓦礫としての歴史の茂みを覗く可能性は閉ざされてしまう」（内田 2001: 203、強調原文）。つまり、探偵は究極的には同一性＝「統合」を志向しているのである。それに対して、ベンヤミンが呈示する「目覚め」の技法は、既存の「歴史」や「物語」の「統合」から過去の痕跡を切り離す。そうすることで、「時間の流れが一瞬稲妻に打たれたように静止して、時間の順序がゆらめき、思いもかけない仕方」で「過去」が固定的な時間連関から抜け出し、現在と衝撃的に交叉するような時間の経験が生じるのである（内田 2001: 192-4）。

以上、内田隆三の探偵小説論を通じて、ベンヤミンの時間論を見てきた。探偵と歴史家たちはともに通俗的な時間認識、つまり「直線的時間」に依拠している。しかし、探偵はその「直線的時間」軸上で、「現在（痕跡）→過去」という「想起の時間」をたどることで、現在を過去との深いつながりに「目覚め」させる（「過去（動機）→現在」）。それに対して、ベンヤミンの「目覚め」が要求するのは、「直線的時間」それ自体からの「目覚め」である。作田もまた、①の領域が依拠する「直線的時間」が「脱臼」する瞬間（③の領域）に光を当てた。そうすると、ベンヤミンの「目覚め」とは、作田が「放心」という概念によって光を当てた③の領域の経験なのである。ベンヤミンによれば、ふつう私たちが「覚醒」していると思っている状態（①の領域）が「夢」であり、「かつてあったもの」のなかに「目

覚め」がある。作田は「かつてあったもの」に「目覚め」があるとは言わないが、ふつう私たちが「覚醒」していると思っている状態(①の領域)ではなく、私たちが「例外」だと思っている経験(③の領域)に「リアル」があるという。ベンヤミンと作田は、「直線的時間の脱臼」に着目するという点で、共通した関心があると言えるであろう。

それでは作田とベンヤミンはなぜ「直線的時間の脱臼」に着目するのか。言い換えると、「直線的時間の脱臼」にはどのような理論的意義があるだろうか。ここで手がかりになるのが、内田の「物語」という言葉である。次章で検討しよう。

3. 作田の時間論の意義についての考察——直線的時間・同一性・物語

前章の最後に述べたように、本章では作田を離れて、その時間論を他の社会学者などの仕事と接続することで、その意義を考察する。

(1) 物語・直線的時間・同一性

内田は、「探偵の説明は諸々の痕跡を統合する物語に志向しており、物語の瓦礫としての歴史の茂みを覗く可能性は閉ざされてしまう」と述べていた。ここには、「物語」は諸々の痕跡の「統合」を志向する行為であるという理解がある。このことについて、物語論から検討しよう。

物語論は社会学に出自をもつものではない。その典型は歴史学における物語論、つまり「歴史とは事実ではなく物語である」という言明であるが(片桐 2005)、そのほかにも、哲学や文学理論においても物語論と呼ばれるアプローチがある。

他方、「物語」に対して社会学が注目したのは、主に「自己」と「記憶」という観点からである(たとえば片桐 2000; 2003)。「自己」が「物語」であるということは、近年の社会学において常識となりつつある。文学、歴史学、臨床心理学における物語療法など、さまざまな物語論を整理・検討した浅野智彦は、「物語」の形態上の特徴と効果を、次のように分けている。まずその形態上の特徴とは、「①物語は時間軸にそった出来事の選択的構造化である」、「②物語は〔引用者注：語り手と登場人物という〕2重の視点を生み出す」、「③物語は他者とのやり取りの中で生み出される」というものである。次に、その効果とは、「①物語を通して現実が構成される」というものと、「②物語を通して可能性や矛盾が隠蔽される」というものである(浅野 2001: 62-3)。②は、同一性が付与される、と言い換えてもよいであろう。つまり、「自己」とは「物語」という行為によってその同一性を産出・維持しているのである⁵⁾。たとえば、「日本人」についての「物語」は、「8月6日」、「8月9日」の広島・長崎への原爆投下などの過去の出来事を「日本人ならば忘れてはならないこと」として、反対に「南京事件」のような「日本人」の同一性を危うくさせる過去の出来事は「なかったこと」にしてというように、「日本人」という同一性は過去の出来事を選択し、構造化することで産出される⁶⁾。

それでは、同一性を付与する「語り」は、どこから発せられるのか。ここで重要なのは、「物語」を語り始める「視点」(位置)である。哲学者のP.リクールによれば、「結末は話に『終点』を与え、終点は、話が全体を形成するものとして認められるような視点を提供する」(リクール 1987: 121)。このように、「物語」は「終点」としての現在から過去に遡

及するまなざし（これは「探偵」のそれである）によって、現在を「結末」として他者に納得させようとして語られるのである。そして、語り手は話の筋にしたがって過去の諸々の出来事を選び取って、1つの「全体」を構造化する。そこで、過去の諸々の出来事は現在に同一性を付与するために編集・加工され、同一性を乱すものは「排除」される。そして、重要なのは、ここで「物語」が「直線的時間」への信頼によって成立していることである。「物語」は「直線的時間」の不可逆性により、「別の物語」の可能性を隠蔽する。そして、「別の物語」の可能性の隠蔽は、同時に、同一性を偽装することなのである⁷⁾。

(2) 「別の物語」の可能性

作田の「放心」概念は、このような「物語」の隠蔽作用に対して意義をもつ。「放心」において現れる既視感や予感、は、「直線的時間」の不可逆性と、「語り」によって創出されている「語られる主体」の同一性を宙吊りにする。そこでは「物語」が依拠している「直線的時間」が「脱臼」しているからである。

さらに、「放心」において経験される「分身」という現象も、「物語」との関係で次のように解釈できる。「物語」は「結末」としての現在から過去へと遡及するまなざしによって過去の出来事を選択し構造化することで、1つの「全体」を形成するが、その「語り」は同時にそこから排除されるもの＝〈残余〉を産出する。作田によれば、「分身」は言語による象徴化から洩れ落ちる〈残余〉であったが、物語論を踏まえるならば、「分身」とは「語り」による選択的構造化が（〈残余〉という形で）生じさせた「別の物語」の可能性の、文学的な形象として理解できる。

冒頭に述べたように、「放心」概念、「直線的時間の脱臼」、「同一性の解体」の理論的な意義の検討は、作田によって積極的にはされていない。しかし、それらの概念を（自己）物語論と接合することで、同一性のゆらぎと「別の物語」への可能性が、「放心」する主体の既視感や予感、「分身」という経験として記述されることが、明らかになるのである⁸⁾。

4. おわりに

本稿は、「放心」概念に着目しつつ、作田の時間論を再構成するとともに（2章）、作田の時間論とベンヤミンの時間論の類似、作田社会学の物語論的書き換えの方向を探ってきた（3章）。すでに述べたように、作田の時間論の要点は「直線的時間の脱臼」にあるが、その要点が成立したのは、〈残余〉と「同一性の解体」に着目するという作田の社会的センスとも言うべきものによる。

しかし、その感覚的なものも、作田社会学の検討と文学理論（今回は物語論）の観点を組み合わせることによって、作田社会学を文学理論の観点から書き換えるという形で継承することができるのではないかという提案が、本稿3章の試みであった。具体的に言えば、「物語」が依拠する「直線的時間」が「脱臼」する瞬間が「放心」であり、「分身」とは、「別の物語」への可能性として読み換えられるということを示した。本稿で示した、文学理論と作田社会学の接合という方向性は、作田社会学の再考とともに、「文学からの社会学」（岡崎 2016）を再考することになるはずである。

註

- (1) 作田は「表象も象徴体系も、事実と次元を異にする情報の領域に属している」（作田 2012: 23）と述べているが、この「情報」の概念の内実是不明なので、ここでは作田の関心が「情報の領域」から「洩れ落ちる」部分に向けられていることだけを確認し、見田宗介（1996）や吉田民人の「情報」概念との比較は、別の原稿で検討したい。
- (2) 作田がジョルジュ・シムノン論（作田 [1971]1990）やルソー論（作田 1980）で中心的に論じた「空想」もまた③の領域に入ると思われる。これらの論稿でも作田は「放心」概念を用いて「空想」について検討しているからである。このように、③の領域は作田が中心的に扱った領域だが、その内部のさらなる分類は、稿を改めて論じたい。
- (3) 本稿では、「脱臼」という用語に be out of joint を当てた。J.デリダは、シェイクスピアの『ハムレット』の一節〈The time is out of joint.〉について、次のように述べている。「Time は、あるときは時間そのもの、時間の時間性であり、あるときは時間性が可能にするもの（歴史としての時間、目下の時間=時代、われわれが生きている時間=時代、今日という日々、^{エポック}時代）であり、あるときはしたがって、進行する世界、今日のわれわれの世界、われわれの今日、^{アクチュアリテ}現在性そのものである。……この Time とはすなわち、時間でもあるが、歴史でもあり世界でもあるのだ」（Derrida 1993=2007: 34-5）。デリダはこのように指摘し、独特の「亡霊 (spectres)」論を展開する。デリダによれば、「亡霊」は、見られることなく見る存在である。そこで、「それは共時性を解体し、^{アナクロニー}錯時性にわれわれをひきもどす」（Derrida 1993=2007: 29; 370 の訳注 14 も参照）。
- (4) 作田はここで E.M.フォースターを参照して探偵小説の「文学的感動」について述べている。また、この点については作田（[1968] 1990）も参照してほしい。
- (5) 本稿では検討しきれなかったが、「物語としてのネーション」という論点を深めることで、作田がベルクソンから学んだ「閉じた社会・開いた社会」の対概念を書き換える方向が見えてくる。B.アンダーソンは、「近代的国家」に見られる「ネーション」という「想像の共同体」が、ベンヤミンの言う「均質で空虚な時間」に基づいているということを述べている（Anderson 2006=2007）。
- (6) これと関連して、浅野は「社会学的自己論」の「関係への還元」について強い違和感を抱いていた社会学者として作田を挙げている（浅野 2001: 175）。
- (7) R.バルトは「神話」（物語）の偽装する「自然らしさ」が「安心」をもたらす機能について、次のように述べる。「神話はものごとを純化し、無垢にし、自然と永遠性の中に置くのだ。……もしわたしが、説明せずに「フランス帝国性」を確認するなら、わたしが、それを自然なもの、あたりまえなものと思えずには大した苦勞はない。そこでわたしは安心していられるのだ」（Barthes 1957=1967: 189）。
- (8) 以上のことから示唆されるのは、「自己」が時間的に錯綜しており、かつ、別様でもありうるという可能性を含みもつ不安定なものである、ということだ。作田は「日本近代文学における自我の放棄」（作田 2016ab）で、「主体性」「自律性」「原理性」を構成要素とする「近代的自我」を「放棄」した営みとして日本近代文学を見なし（作田 2016a: 198-9）、文学者の伊藤整の枠組みや「放心」概念を用いて、「近代的自我」とは異なる「主体」の像を描こうと試みた。作田はこの試みを途上で終えたが、筆者はこの方向を文学理論の観点から引き継ぐことを考えている。たとえば作田は、古井由吉『祈りのように』を分析する際、「語る主体」について言及する（作田 2016b）。この作品は、夫に連れ添った妻の語りを語り手の友人が聞き、その友人から語り手が聞く、という構造をもつが、こうした複層的な語りの構造の小説に、小説の形式面への関心をもつ

のがまねな作田（この点については作田 1988）が惹かれたことの意義は大きい。なお、作田社会学と文学理論の接合という方向は片上平二郎氏のご指摘から示唆を受けた。

参考文献

- Anderson, Benedict, 2006, *Imagined communities : reflections on the origin and spread of nationalism*, London and New York : Verso. (=2007, 白石隆・白石さや訳『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山.)
- 浅野智彦, 2001, 『自己への物語論的接近——家族療法から社会学へ』勁草書房.
- Barthes, Roland, 1957, *Mythologies*, Paris : Les Éditions du Seuil. (=1967, 篠沢秀夫訳, 『神話作用』現代思潮新社.)
- バルクソン, H, 2002, 合田正人・平井靖史訳『意識に直接与えられたものについての試論——時間と自由』筑摩書房.
- ベンヤミン, W, 1995, 浅井健二郎編訳・久保哲司訳『ベンヤミン・コレクション1——近代の意味』筑摩書房.
- , 2003, 今村仁司・三島憲一ほか訳『パサージュ論 第3巻』岩波書店.
- Derrida, Jacques, 1993, *Spectres de Marx : L'État de la dette, le travail du deuil et la nouvelle Internationale*, Paris : Galilée. (=2007, 増田一夫訳『マルクスの亡霊たち——負債状況=国家、喪の作業、新しいインターナショナル』藤原書店.)
- 梶井基次郎, 2008, 「冬の日」『ちくま日本文学 028 梶井基次郎』筑摩書房, 297-324.
- 片桐雅孝, 2000, 『自己と「語り」の社会学』世界思想社.
- , 2003, 『過去と記憶の社会学』世界思想社.
- , 2005, 「物語る私」井上俊・船津衛編『自己と他者の社会学』有斐閣アルマ, 79-95.
- 真木悠介, 2003, 『時間の比較社会学』岩波書店.
- 見田宗介, 1996, 『現代社会の理論——情報化・消費化社会の現在と未来』岩波書店.
- 岡崎宏樹, 2016, 「文学からの社会学——作田啓一の理論と方法」亀山佳明編, 『記憶とリアルのゆくえ——文学社会学の試み』新曜社, 169-96.
- リクール, P, 1987, 久米博訳『時間と物語』新曜社.
- 作田啓一, 1980, 『ジャン・ジャック・ルソー——市民と個人』人文書院.
- , 1988, 『ドストエフスキーの世界』筑摩書房.
- , [1968]1990, 「文学的感動の図式」『仮構の感動——人間学の探求』筑摩書房, 7-33.
- , [1971]1990, 「ロマン派の行動——ジョルジュ・シムノン」『仮構の感動——人間学の探求』筑摩書房, 118-39.
- , 2012, 『現実界の探偵——文学と犯罪』白水社.
- , 2016a, 「日本近代文学に見られる自我の放棄——伊藤整の枠組に従って」亀山佳明編, 『記憶とリアルのゆくえ——文学社会学の試み』新曜社, 197-228.
- , 2016b, 「日本近代文学に見られる自我の放棄（続）——リアルの現れる場所」亀山佳明編, 『記憶とリアルのゆくえ——文学社会学の試み』新曜社, 229-63.
- 内田隆三, 2001, 『探偵小説の社会学』岩波書店.
- 若林幹夫, 2014, 『未来の社会学』河出書房新社.